

ティホ氏（オランダ）による講演内容まとめ

平成 30 年 7 月 13 日
わらしべ会 辻 和也

平成 30 年 7 月 12 日（金）に行なわれた全日本柔道連盟主催の知的障がい者柔道の講習会の内容を以下にまとめておく。本講演は、ヨーロッパの知的障がい者柔道を牽引してきたオランダのティホ氏によるもので、今後われわれが日本でこうした活動を展開する上でも参考になるものであり、残念ながら参加できなかった方、今後こうした活動に興味をもたれる方にも、概要だけでも伝えておきたいという思った次第である。

私自身も本年 4 月にオランダでティホ氏の主催する障がい者柔道大会を見学する機会に恵まれたが、大会の概要を知ることはできたものの、背景や考えなど大会を支えるソフトの部分については、時間の関係もあって十分知ることができなかった。その部分を本講演では、ずいぶん補うことができたのも整理しておきたいと思った理由である。

以下のレポートは、配布された資料と通訳を通じて聞いた講演での話、若干私自身の知っていることや資料も加えてまとめている。依然、誤解している部分もあるかも知れないが、今後彼らとさらにコンタクトを重ねるにしたがって修正していきたい。

ともかく、現状での情報を他の方と共有できたら幸いである。

【講演概要】

- ・「オランダ知的障がい者柔道指導者講習会」

ティホ氏によって示された講演のタイトルは、以下のとおり。

「Special Needs Judo in the Netherlands

Safety and Training methods for Special Needs Judoka」

- ・主催：全日本柔道連盟
- ・日時：平成 30 年 7 月 12 日（木）16：30～18：00
- ・場所：講道館新館 2 階研修室（東京都文京区春日 1-16-30）
- ・内容：オランダの知的障がい者柔道の第一人者であるティホ氏による、オランダでの障がい者柔道の活動や指導法、安全管理について。

【講演内容】

●オランダにおける障がい者柔道の歴史

- ・オランダにおける障がい者柔道の歴史は、古くは 1960 年代にさかのぼるが、具体的な広がりを見せるようになった現在の活動へ続く初めの活動は 1980 年代の Ben van der Eng 氏（以下、ベン氏）による。
- ・ベン氏はまず国内で障がい者柔道の大会を実施した。この準備段階で、国内の多くの指導者とコンタクトを取り、柔道をしている障がい者がどの程度いるのか把握することができた。
- ・1990 年代になるとスウェーデンのトマス氏らとともに活動し、大会の国際化が進められた。同時に大会運営、試合の進行方法についても検討が



オランダの障がい者柔道を牽引したベン氏（2015 年死去）

重ねられた。

- 試合で選手のクラス分けをする際に、当初は障害別（ダウン症の人はダウン症の人と対戦し、脳性まひの人は脳性まひの人と対戦）にしていたが、障害別よりもその選手の柔道の習得レベルを視点にクラス分けをするようにした。この方が安全性に配慮でき、選手の力を発揮できることに気づいたからである。
- 1993年にはレベル分けの基準を作成した。
- 2000年にはスペシャルオリンピックスに参加した。（スペシャルオリンピックスの世界大会に柔道競技がデモンストレーションとして最初に参加したのは、2003年ダブリン（アイルランド）大会からである。）
- 2005年には、Cees Roest氏（以下、ケイス氏）らとともに昇級、昇段について整理した。
- 2013年には、形の実施について整備した。
- 2016年には、スペシャルニーズ柔道ユニオン（SNJU）を立ち上げた。
- これらの過程で作りに上げてきた障がい者柔道の試合に関するルールは、スペシャルオリンピックスでの柔道競技のルールの土台となっている。



ケイス氏。ともに来日し、本講習にも参加していた。

● スペシャルニーズ柔道ユニオン（SNJU）とは？

- 執行部の構成メンバーは以下のとおり。

トマス氏
(スウェーデン)
Director



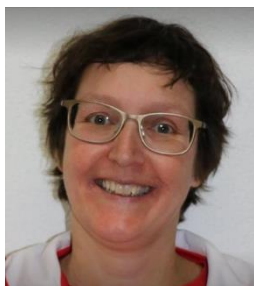
James Mulroy氏
(アイルランド)
Secretary



ティホ氏
(オランダ)
Technical Director



Cecilia Evenblij氏
(スイス)
Publicity



Bob Lefevere氏
(オランダ)
IT director



・活動内容、方針

- ・障害のある柔道選手のエンパワメントと成長
- ・審判、指導員、個々の団体に対する教育
- ・安全で楽しく、かつ正しい申請（※）による大会
（※：英語の資料では「honest」。かつて障害の程度を偽り勝敗に固執した国があったことへの反省から正しく選手のレベルを申請することを指している？と思われる。）
- ・ルールの改正

●安全性について

①クラス分け

- ・クラス分けは5つのレベルで行なわれる。
- ・現在スペシャルニーズの組織では5つで分けているが、ドイツの基準では3つであり、相関関係は図のとおりである。

SN	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
ドイツ式	レベル1	レベル2	レベル3		

- ・現在ではレベル1の選手層が多くなっている。
- ・3つのレベルだと選手層の幅が大きくなり同じリーグで力の差のある選手同士の対戦が起こる可能性がある。
- ・5つのレベルだと反対にレベルが同じように振り分けられ安全性が保たれやすいが、選手の少ない大会だとリーグに代替選手を入れるなどの対応が必要なこともある。

②ディビジョニング（クラス分けのためのプログラム）について

- ・5つのプログラムは、主に試合の前日に1～2時間の合同練習の形で行なわれる。練習プログラムは、グループやペアになって行なわれるレクリエーション的な運動プログラムである。楽しく行なうのをモットーとしているので選手は飽きずに参加する。
- ・このプログラムを通じてディビジョニングを行なうスタッフには以下のような役割がある。

- ◇リーダー（選手を全体的に見てクラス分けを主導する）
- ◇ティーチャー（プログラムを実践、進行する）
- ◇アシスタント（プログラムの進行を補助し、クラス分けをリーダーに助言する）
- ◇ヘッド（主にデスクにおいてリーダーの提案するクラス分けを一緒に検討し最終判断する）

- ・ヘッドは申請されたとおりのレベルでリーグをあらかじめエクセルで表にし、ディビジョニングの結



ディビジョニングの例
（写真はS0のロサンゼルス大会のもの）

果を踏まえ選手を組み替え、翌日の試合に向けたリーグを作る。

- 以上のような過程を経てレベルに応じたクラス分けの精度を高め、力の差があり過ぎない、安全な試合運営を目指す。

③禁止技など

- 関節技、締め技、捨て身技は禁止である。これは障害のある柔道選手はその障害によって、四肢の意図した動きや反応に制限があり、こうした技を受けた場合の反応ができないことが多いためである。
- 頸への負担がかかることは禁止である（首投げや袈裟固めで頸に手を回すなど）。これは以前ドイツの大会でレベル1の選手が頸を骨折したことがあったからである。またダウン症などでは体幹、頸部の筋力が弱く、圧力をかけることで頸椎を痛めたりする可能性があるからである。
- 通常の立った姿勢からだけでなく、寝技から試合を始めることもあり、それも膝立ちの姿勢、長座位の姿勢など、その選手の障害の程度に応じた開始姿勢を設けている。

●障害に応じた練習の留意点（例）

- 講演ではビデオが紹介され、障害に応じた練習、取り組みの留意点が示された。（それぞれのビデオはインターネットを通じて見る事が出来るのでその URL を示す。）

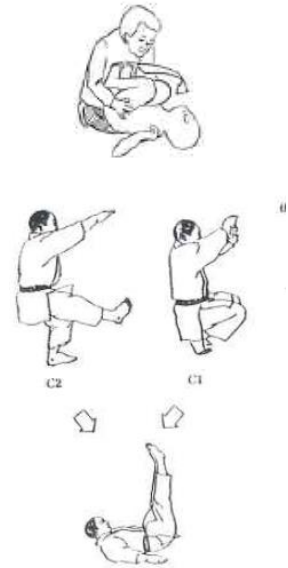
<http://www.specialneedsjudo.nl/instruction-videos/>

- 自閉症では相手に関心を示さないことがあるので、指導者の指示が入りにくい。そこでまずは同じような動きを見える位置で行い、少し関心を示したら、手を握るなどの身体接触を行い、徐々に指導者の存在とその動きを認識させる。こうして同じ動き（後ろに転がるなど）を取り入れながら受け身を習得させることがある。
- 脳性まひではモロー反射（原始反射）が成長過程で消失せず、こうした選手に受け身の練習を始めると後頭部を打つなどの危険がある。これを回避するために、初めは低い姿勢から、指導者が選手の後頭部に手を添えて安全を確保しながら、ゆっくり受け身を取らせるという工夫をする。こうした配慮をすることで、脳性まひの選手は自ら安全な受け身の動きを習得する。

- 「モロー反射」：赤ちゃんが、音などに反応し、だっこを求めるように大きくのけぞって両手をあげる動きをすること。
- モロー反射などの原始反射は、どんな赤ちゃんでも見られる反射であるが、成長とともに消失し、多彩な動きを獲得するようになるのが一般的である。しかし、出生時に脳に何からの障害を持って生れた脳性まひの児は、成長の過程でこうした原始反射が消失せず、残存することがある。



- 余談であるが、当法人（わらしべ会）の創設者である医師の村井正直も、同様の視点に立ち、脳せいまひの四肢の緊張（本人の意思に反して、四肢に力が入り、いわゆる全身が突っ張った状態になること）を、柔道の受け身の動きを使い、脳性まひ児が自らそれを学習することで、緊張を緩和し、四肢をコントロールすることを指導した。
- こうした両者の共通点に触れ、柔道の可能性を示す一つの視点となり得ることを改めて感じた。



●最後に

- 指導者に対して最後に以下のような助言がされた。

「Be yourself, Try out things, Learn from the Judoka」

- 「自分らしくあり、いろいろなことに挑戦し、（障害のある）柔道選手から学ぼう」ということか。
- 私自身は、講演の最後にティホ氏が言った「個別性に配慮して、楽しみながら、コーチと一緒に練習する」という指導姿勢に感銘を受けた。